

序

我不愛身命 但惜無上道の教えは本化御門下たる我々の忘れてはならない誠めであり、宗祖ののこされた行蹟をおそい「二陣三陣」つづけとの遺誠を守り、妙法弘通 四海帰妙の願業達成に邁進することこそ仏子であり、仏使である我々のつとめであろう。

同時に、無上道の妙法をひろめるにはその任に耐え得る身心の鍛錬が求められよう。行学未練にしては我不愛身命の心地に安住しがたいからである。先師は「我れ無上道を惜む故に身命を愛す」といったが、これはすべて我が身心は妙法弘通に回向すべきものであることをのべたのである。

京都妙覚寺実成院日典が天正十六年（一五八八）十二月、弟子日奥を誠めて告げた言葉に

万事をさしおきて精進の行をすべき由申しければ、余りさやうに思ふべからず、末久しく仏法の用に立たんと思ふに早く死すれば詮なき事なり。我が年まで生くとも三十五・六年はあとにゐて仏法の用に立つべき者が、何がさやうに身をつめては無益の事なりと云々。これは師の御年七十一、我が年二十四の時なり

と。このあと四年後、同二十年七月二十五日、日典は七十四才で入寂、更に四年後、文禄四年（一五九五）九月、秀吉の催した千僧供養が始まり、これを契機として日奥の我不愛身命、但惜無上道の勇猛、精進力が秀吉、家康に対し発露するのである。現今は幸いにもこのような迫害、弾圧はおこなわれることはないが、我々は先師の道念を日々
の誠めとし切瑳琢磨し持ちつづけたいものである。

平成二年三月令日

宮 崎 英 修